

神馬事記念館



釧路市

大楽毛は馬のまち



神馬事記念館 内観



神馬事記念館 内観



大楽毛駅

大楽毛駅について

大楽毛駅は明治34年（1901年）、釧路から白糠までの鉄道開通を機に内陸と舌辛村方面（現阿寒町）への交通接続点として開駅され、大楽毛の地名（アイヌ語オタノシケ「砂浜の中央」の意味）を付して命名されました。かつて駅前にあった当時の大楽毛家畜市場のイメージを取り入れ改築され、駅前広場には日本釧路種の馬像が建設されました。

神馬事記念館について

釧路馬産の歴史と、神 八三郎氏の偉大な業績を永く後世に伝えるため、釧路産馬の発祥の地である大楽毛馬市場跡地に建設されました。

神家のご厚意により寄附いただいた、神翁が残された貴重な資料や、古い馬産家から寄附いただいた写真、記録、著書、馬に関する器具等を展示しています。

神馬事記念館の経緯

昭和46年7月

財団法人 神翁顕彰会、釧路農業協同組合連合会によって神馬事記念館が建設、開館。

平成18年12月

土地・記念公園を釧路農業協同組合連合会より釧路市が寄附受納。

建物・所蔵資料一式を財団法人 神翁顕彰会より釧路市が寄附受納。



大楽毛駅前 日本釧路種の馬像



神 八三郎像

神 八三郎翁の経歴（抜粋）

慶応2年2月19日	青森県津軽郡鰺ヶ沢に生れる
明治20年	青森県より来釧し、土木請負業を開始
明治27年	農牧業に転じ馬産改良に着手
明治39年9月	釧路産牛馬組合を創立、創立委員に就任 釧路郡農会長
大正8年9月7日	優良馬匹の繁殖の功により緑綬褒章受章
大正15年10月8日	紺綬褒章受章
昭和8年3月6日	緑白綬有功章受章
昭和11年9月27日	釧路行在所において産馬について奏上
昭和15年3月31日	馬事振興の功により農林大臣表彰
昭和15年11月10日	叙勲六等授瑞宝章受章
昭和23年3月	北海道馬事協会会長
昭和27年9月5日	日本釧路種、奏上釧路種改良の功により農林大臣表彰
昭和30年11月3日	藍綬褒章受章
昭和30年12月16日	逝去（89歳）
昭和30年12月16日	叙勲四等旭日章受章
昭和43年11月23日	農林漁業振興功労者として明治100年記念農林大臣表彰



神 八三郎翁



奏上釧路種

日本釧路種、奏上釧路種を作るまでに神 八三郎は様々な土地へ視察を行いました。国に掛け合い当時の満州や朝鮮へも赴いています。

また、昭和21年、27年には敗戦間もない混乱期にも関わらず、優良種牝馬一千頭の大共進会を開催し、釧路を名馬王国として確立させました。

大楽毛の今と昔



1944 (昭和19) 年撮影 (国土地理院撮影の空中写真 (1944年撮影) を加工して作成)



2015 (平成27) 年撮影 (国土地理院撮影の空中写真 (2015年撮影) を加工して作成)

大楽毛の今と昔



釧路畜産組合大楽毛家畜市場全景



大正5年8月撮影 大楽毛家畜市場開催時に於ける大楽毛駅の乗客殺到風景（大楽毛駅）

大楽毛馬市が黄金時代を迎えていた頃を知る大楽毛の馬産農家の三代目、三宮 久蔵さんが語る当時のエピソード

「大楽毛馬市には全国から人が集まり、大楽毛の民宿に泊まっていた。当時はトラック等の自動車がなかったため、遠方から馬市に参加する人は貨物列車で馬を運搬し大楽毛駅で馬を乗降させていた。近隣の人は馬に乗ってやってきていた。馬市から大楽毛駅までの通りには飲み屋がずらっと並んでいて、すごく賑やかだった。当時は馬の取引は現金のみで行っており、馬を売った人はリュックにその代金を入れ飲み歩いていた。なかには、その日のうちに売却代金を使い果たし、帰りの汽車賃までも使ってしまう人もいた。」



当時の様子を知る 三宮 久蔵さん

馬市について



創設当時の大楽毛家畜市場

釧路地方の馬産は、寛政 12 年（1800 年）、蝦夷地の警備と開拓のため、江戸幕府の許可を得て白糠に入った「八王子千人同心」の原半左衛門胤敦（はらはんざえもんたねあつ）らが持ち込んだ、運搬や乗用などに使役されていた「南部馬」の繁殖がはじまりと伝えられています。

明治時代（1868 ～ 1912 年）の初期には、北海道開拓を進めるために馬が配備され、その後、釧路地方でも「北海道国有未開地処分法」（明治 30 年）を背景に大規模な牧場が相次いで誕生しました。また、明治 34 年（1901 年）には陸軍により「軍馬補充部釧路支部」が白糠村に開設され、国家事業として馬の買入の開始、さらには、馬の生産者の組織化が進み、良馬生産を目指すこととなりました。

明治 44 年（1911 年）、皇太子 明宮（後の大正天皇）による釧路町知人岬での釧路産馬 30 頭の台覧を契機として、国家的要請により官主導の釧路産牛馬組合が大楽毛家畜市場（通称：馬市）を開設します。炭鉱・林業における運搬馬としての急増により馬の需要が高まり、商品としての馬生産が成立したことから、釧路は馬産地として存在感を増していきます。これには、釧路産牛馬組合長の神 八三郎の卓越した指導があったことは言うまでもありません。

馬市について



昭和9年撮影 大楽毛馬市（大楽毛家畜市場）



昭和30年頃撮影 大楽毛馬市（大楽毛家畜市場）



「日本釧路種」の種牡馬



奏上釧路種

大楽毛馬市(大楽毛家畜市場の通称)は、明治44年(1911年)に釧路産牛馬組合によって開設され、セリは毎年8、10、11月に開催され、全国各地から馬商(馬喰)、農林省・陸軍省(軍馬補充部)の役人、畜産組合の馬産関係者、馬主等が多数集まり、年により臨時市も開催されるなど大変な賑わいを見せました。

第一次世界大戦(1914 - 1918)後、馬の価格の下落に加え、昭和恐慌の大打撃と冷害で貧苦にあえぐ組合員を救うため、大正8年(1919年)釧路畜産組合は時代に合った改良馬生産計画を樹立、また神八三郎らにより、寒さに強く日本人の使役に適する体格の馬として昭和7年(1932年)に日本在来産馬とペルシュロン系の重挽馬の交配による「日本釧路種」、昭和13年(1938年)にアングロノルマン系馬との交配による「奏上釧路種」が完成します。

産馬改良の賜物である、小柄で馬力があり実に扱いやすいこれらの馬は、軍馬や農耕馬として隆盛を極め、各地から大勢の人がそれらを求め集まりました。大楽毛馬市は軍馬や民間馬の取引で黄金時代を迎え、東北の盛岡・三本木と並ぶ「三大馬市」として全国にその名を知られました。

しかし昭和30年(1955年)、偉大な指導者であった神八三郎が逝去、また高度経済成長とともに従来、馬が重要な役割を果たしてきた農林業や輸送業においても、トラックやトラクターなど石油を燃料とする動力機械が導入され、都市だけでなく農村地域にも急速に普及していきます。馬の生産は減少し、大楽毛家畜市場は衰退していきました。また、釧路が唯一の産地だった「日本釧路種」も雑種化が進み、姿を消していきました。

馬市について



大正11年7月18日撮影 皇太子殿下（昭和天皇）行啓（大楽毛家畜市場）



大正11年7月18日撮影 皇太子殿下（昭和天皇）行啓
（大楽毛家畜市場）



天皇陛下大楽毛家畜市場に 昭和29年8月16日
お着きになった陛下は、神さんの姿をごらんになると、ご自分の方
から声をかけられ『変わりはないか、体を大切に努力するように』
とのお言葉をかけられた

昭和29年8月16日撮影 天皇陛下（昭和天皇）大楽毛家畜市場

明治44年(1911年)に皇太子 明宮(後の大正天皇)が釧路町知人岬で釧路産馬30頭を台覧されました。

大正11年(1922年)、摂政宮(後の昭和天皇)が大楽毛家畜市場でカケタカ号ほか22頭の釧路産馬の台覧をされ、昭和11年(1936年)の釧路市行幸、昭和29年(1954年)の北海道巡幸の際には、神八三郎から説明をお受けになりました。

昭和33年(1958年)には皇太子(後の平成天皇)が大楽毛家畜市場にお立ち寄りになり、牛馬を台覧されました。

この他、昭和3年(1928年)に秩父宮が浜中村の茶内原野にて雪中放牧を台覧、昭和7年(1932年)に三笠宮が大楽毛家畜市場を訪れ台覧、戦後にも常陸宮が家畜市場を訪問されました。

こうした天皇家三代及び皇族の台覧は、釧路の改良馬産生産に対し大きな刺激、励みとなり、精神的な支えとなりました。

馬市について

釧路産馬歴史（明治20年以降）

西暦	和暦	主な馬産の推移	馬と社会の関わり	釧路の歴史
1887	明治20	神 八三郎が青森県より来釧し、土木請負業を開始。		安田 善次郎により標茶～跡佐登(アトサヌプリ)に鉄道が開通、硫黄採掘が本格化。春採湖畔にも炭鉱を開坑(春鳥炭山)。
1894	明治27			日清戦争始まる。
1895	明治28	農民の入植が本格化し、農耕馬生産が始まる。	日清戦争(1894～1895)によって日本国内で運搬と進撃用軍馬の重要性が叫ばれるようになり、日本馬に対して再検討の機運が高まる。 種馬所が全国に設置。	日清戦争終結。
1897	明治30	国有未開地処分法により牧場が増加。		郡区役所廃止、釧路支庁が設置される(北海道内19支庁)。
1899	明治32	神 八三郎が釧路町に共同牧場を設立、本格的に馬産に着手。		釧路港が普通貿易港に指定され、8月に開港する。
1900	明治33		産牛馬組合法公布、全国各地で産牛馬組合結成。	北海道一・二級町村制が施行、(旧)「釧路町」となる。 初代幣舞橋が架設される。
1901	明治34	軍用補充部釧路支所設置(現:白糠町)。	国による優良軍用馬の買上が始まる。	天寧で前田製紙工場が操業を開始する。 釧路～白糠に鉄道開通、大楽毛駅開業。
1904	明治37			日露戦争開戦。
1905	明治38			日露戦争終結。
1906	明治39	釧路国産牛馬組合設立、神 八三郎が創立委員に就任。	明治天皇から馬匹改良の指示を受け馬政局設置。 第一期に国内馬の3分の1に洋種血統を導入、第二期に国防と産業の双方に適した馬の造成を目標とした馬政第一次計画が樹立(第1期18年、第2期12年)。	前田 正名が阿寒湖畔一帯の土地払い下げを受け、開発に乗り出す。
1907	明治40	浜中村霧多布で釧路国産牛馬組合による牛馬のセリ市開催。 釧路支庁(幣舞町)近くの競馬場(馬場)にて釧路国産牛馬組合主催の馬のセリ市開催。 軍用補充部釧路支所音別派出所設置(現:音別町)。		落合～新得の開通により、釧路から函館まで鉄路がつながる。 八戸からの漁民が進出する。
1908	明治41	軍用補充部川上支部を標茶に設置(現:標茶町)。		石川 啄木が来釧、旧釧路新聞で記者として76日間滞在。
1909	明治42	第1回釧路種馬共進会開催。		釧路港修築案が帝国議会通过し、翌年より修築工事が開始される。
1911	明治44	大楽毛に国有種牡馬派遣種付所設置。 皇太子(後の大正天皇)が釧路町知人岬で釧路産馬30頭御台覧。 大楽毛家畜市場開設(通称:馬市)が大楽毛駅前―帯を場内として開設、炭鉱業、林業で運搬馬の需要が急増し、馬の取引増加。		
1914	大正3			第一次世界大戦始まる。
1916	大正5	法改正により釧路国産牛馬組合の名称が釧路産牛馬畜産組合に改称し、馬の所有者は強制加入となる。		
1917	大正6			阿寒川の切替工事が完了する。 釧路駅が現在地に移転。旧駅は貨物駅「浜釧路駅」となる。
1918	大正7		第一次世界大戦終結後、馬の価格が下落する。	第一次世界大戦終結。

馬市について

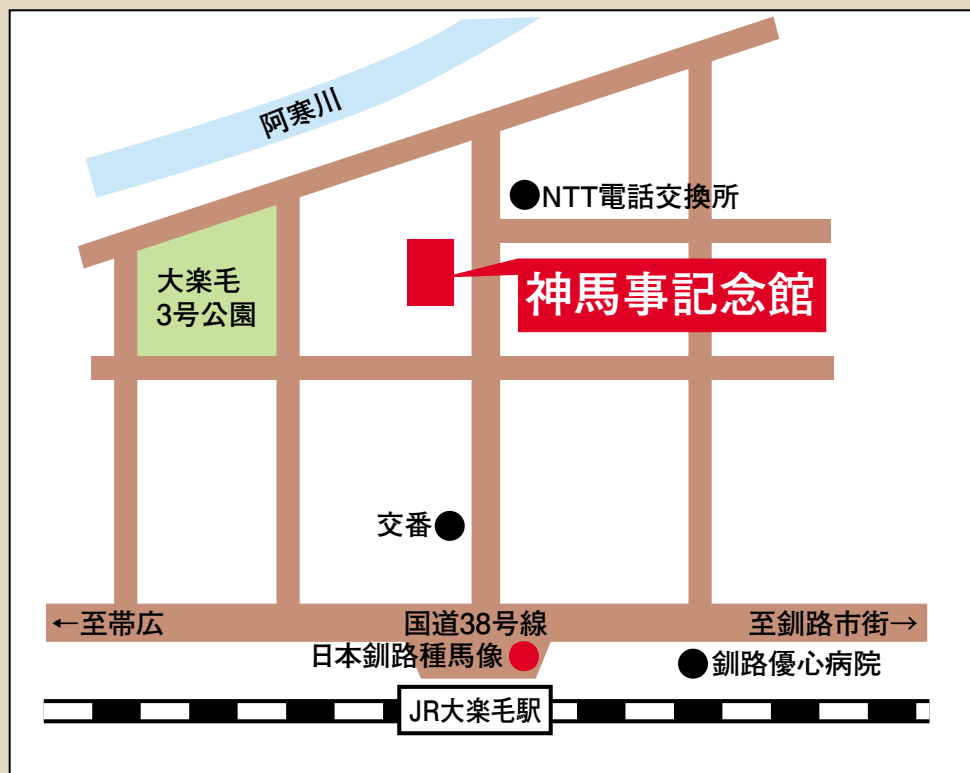
西暦	和暦	主な馬産の推移	馬と社会の関わり	釧路の歴史
1919	大正8	釧路産牛馬組合が北海道庁及び政府に畜産改良方針に関する陳情書提出、小格重鞍馬・重乗馬の生産を組合の方針として定める。		
1920	大正9			北海道区制が施行され、釧路区となる。 豪雨により釧路川・阿寒川が氾らんし、釧路の市街地は洪水となる。翌年より釧路川治水工事が開始される。 木村組釧路炭鉱（春採）と三井鉱山別保炭鉱が合併し、太平洋炭鉱となる。 富士製紙釧路工場（後の日本製紙釧路工場）が操業を開始する。
1922	大正11	摂政宮（後の昭和天皇）大楽毛家畜市場で釧路産馬20頭台覧（お野立て所にて）。		市制施行、釧路市となる。
1925	大正14	釧路産牛馬畜産組合が釧路畜産組合に改称。 第1回釧路2歳馬共進会開催、ベルシュロン種の間種明2才馬を主とする馬だけの共進会が初めて開催される。		
1926	大正15／昭和1	釧路産馬方針が全国の範例となる。		
1927	昭和2			上水道が敷設され、給水が始まる。
1928	昭和3	秩父宮、浜中村茶内原野にて雪中放牧台覧（この際に搭乗された馬橋が神馬事記念館内に展示）。		永久橋である幣舞橋（4代目）が架設される。
1930	昭和5			丸三鶴屋デパートが開業する。
1931	昭和6	大楽毛家畜市場が3,900頭の取引を行い、全国第一位の大市場となる。		釧路川治水工事が竣工し、新釧路川への通水が始まる。
1932	昭和7	澄宮（三笠宮殿下）大楽毛家畜市場台覧。 「日本釧路種」創出発表。 神 八三郎が釧路畜産組合の組合長に就任、馬政調査会の委員に任命。		字(町名)地番改正を実施。
1935	昭和10			タンチョウが国の天然記念物に指定。
1936	昭和11	昭和天皇の釧路市行幸の際に神八三郎が釧路の産馬について奏上する、翌10月昭和天皇が北海道種畜場にて釧路産馬を天覧。	陸軍の要求を容れた国防上必要な有能馬の充実を目標として馬政第二次計画が樹立。	
1937	昭和12	釧路種馬所設置。 釧路産馬の改良馬種が馬政第二次計画と合致し、大楽毛家畜市場で軍馬の買上が急増する。		日中戦争(支那事変)始まる。
1938	昭和13	昭和天皇釧路市行幸を契機に「奏上釧路種」創出発表。		
1939	昭和14		馬政関係三法が成立される。 ・競馬法の臨時特例に関する法律 ・種馬統制法 ・軍馬資源保護法	
1941	昭和16			太平洋戦争開戦。
1942	昭和17	法改正により釧路畜産組合が名称を釧路産馬畜産組合に改称。		
1943	昭和18		旧満州方面への軍用配備が盛んになる。 戦時体制のもと、すべての農業団体は、農業会に統合され、戦争遂行のための国策機関となる。	

馬市について

西暦	和暦	主な馬産の推移	馬と社会の関わり	釧路の歴史
1944	昭和19	法改正により釧路産馬畜産組合が名称を釧路馬匹組合に改称。		戦況悪化により石炭の海上輸送が困難となり、労働者を釧路炭田から本州・九州の炭鉱へ配置転換。
1945	昭和20	太平洋戦争終戦、陸軍省が廃止され、軍馬補充部も解散となる。		北海道各地が空襲され、釧路でも大きな被害が出る。 太平洋戦争終戦。
1946	昭和21	神 八三郎は農村再建と食糧増産を訴え、産業用馬の必要を説き、釧路種馬一千頭共進会開催。	馬需要は軍馬から農業用に転換。	
1948	昭和23	農業会解散、地区連経て釧路農協連設立。		
1952	昭和27	2度目の釧路種馬一千頭共進会開催。		十勝沖地震発生、北埠頭が壊滅状態に。
1953	昭和28			大楽毛～網走が国道240号線として指定される。
1954	昭和29	北海道巡幸の際、昭和天皇が大楽毛市場で馬を天覧。		
1957	昭和32	この年をピークに馬の飼養頭数減少。 神翁銅像が建立される。		
1958	昭和33	皇太子（後の平成天皇）が大楽毛家畜市場にて牛馬台覧。		
1959	昭和34			大楽毛に本州製紙釧路工場（現在の王子マテリア(株)釧路工場）が設置、操業を開始する。
1961	昭和36			釧路駅の現在の駅舎が完成。 釧路空港が開港。
1965	昭和40			大楽毛に釧路工業高等専門学校開校。
1966	昭和41	大楽毛家畜市場が釧路農業協同組合連合会畜産農業センター構内（大楽毛127番地）に移転。		
1967	昭和42			釧路湿原が国の特別天然記念物に指定される。
1969	昭和44			釧路西港第一期工事が着工。 釧路港が初めて水揚量全国一となる。 雄別炭硯(株)が自主廃業、雄別・尺別・上茶路炭硯閉山。
1971	昭和46	釧路農協連により神馬事記念館完成式が行われる。		
1973	昭和48			釧白工業団地が造成される。
1974	昭和49	北海道農協乳牛(株)根釧工場建設の為、大楽毛家畜市場が（大楽毛86番地1号）へ移転。		
1976	昭和51			現在の幣舞橋（5代目）が完成する。
1987	昭和62			釧路湿原国立公園が28番目の国立公園として指定。
1990	平成2	日本釧路種馬像が大楽毛駅前に建立。		
2002	平成14	大楽毛家畜市場がホクレン釧路地区家畜市場に引き継がれる。		太平洋炭硯が閉山、釧路コールマイン(株)が引き継ぐ。
2005	平成17			釧路市・阿寒町・音別町が合併し、新たに「釧路市」となる。
2006	平成18	釧路市が神馬事記念館を寄附受納。		
2008	平成20	第100回釧路種馬共進会開催。		

主な参考文献

「馬産王国・釧路」釧路市 1991
「第 61 回特別展 HOSE -北海道の馬文化-」北海道開拓記念館 2005
「フューチャリティ Vol.50」株式会社ジェイエス 2012
「馬事協会便り第 1 号」社団法人日本馬事協会 2008



神馬事記念館

釧路市大楽毛5丁目9番1号

■見学について

見学には農林課への申込みが必要です。

見学可能時間：平日 午前10時～午後3時

■見学のお申込・お問合せ先

釧路市産業振興部農林課

〒085-8505 釧路市黒金町7丁目5番地

受付時間:平日 午前8時50分～午後5時20分

TEL : 0154-31-2552

FAX : 0154-31-2553

mail :no-nourin@city.kushiro.lg.jp

■ 発行者 釧路市産業振興部農林課

■ 協力 釧路市立博物館

■ 発行日 2024(令和6)年3月